

英国農業革命期の文化遺産としての モデル農場の展示と教育的ツーリズム

— 東イングランドのウィンポール・ホールとナショナル・トラスト
の展示・管理をめぐって —

Educational Tourism, Heritage Management and Wimpole Home Farm, Cambridgeshire: ‘Bringing the Farm back to Life’ and the National Trust

橘 セ ツ

キーワード：1. 教育的ツーリズム、2. モデル農場、3. 文化遺産管理、4. ナショナル・トラスト
5. ウィンポール・ホール（ケンブリッジシャー）

Keywords: 1. educational tourism, 2. model farm (farmstead), 3. heritage management,
4. National Trust, 5. Wimpole Hall (Cambridgeshire)

要旨

ウィンポール・ホール（ケンブリッジシャー）の地所にある農業革命時代のモデル農場は、1976年にナショナル・トラストに譲渡され、1980年から一般に公開されている。それ以来ウィンポールのモデル農場は、ナショナル・トラストによって、歴史文化遺産化されながら、同時に、現在も希少伝統種の家畜が保全のために飼育されることに特徴を持つ農場としても経営されている。本稿では、ナショナル・トラストの「場所に生命を吹き込む」（‘Bringing places to life’）哲学が、どのようにウィンポールのモデル農場の管理・展示に生かされているのか、さらにツーリズムと教育の資源として、どのように活用されているか紹介する。

I はじめに：ウィンポール・ホールと18世紀の英国農業革命時代のモデル農場

英国の古典的な地理学の教科書によると、グレートブリテン島は北東部を流れるチーズ川の河口と南西部のエックス川の河口を結ぶ斜めの線をひくと北西部の高地と東南部の低地に区分される（ステューブソン、1977）。北西部の高地と東南部の低地では、土壌の性質が大きく違う。北西部の高地は固い粘土質の土壌が分布しているのに対して東南部の低地は柔らかい泥岩質の土壌に占められている低くならかな土地から構成される。東南部の低地の泥岩質の土壌は穀物生産の農業に向いている土壌であり、18世紀を通じて遂行された農業技術の革新的な進歩はノーフォーク地方を中心

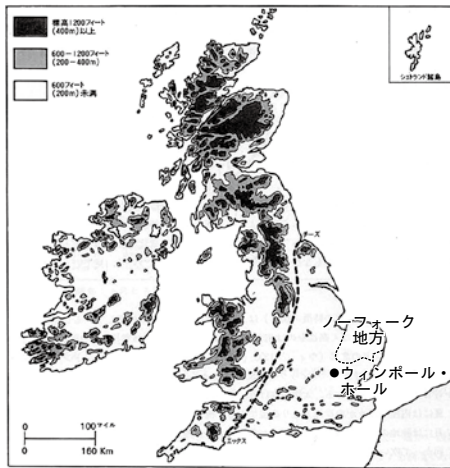


図1 北東部を流れるチーズ川の河口と南西部のエックス川の河口を結ぶチーズエクス線で高地と低地に区分されるイギリス諸島の地形（出典：スティーブソン, K.B. (中村和郎訳, 1977)『全訳世界の地理教科書シリーズ3: イギリスその国土と人びと』帝国書院, p.9から加筆)

とする東南部の低地で興った。

17世紀後半以降、英国で緩やかに進展した農業革命は、次の2つの段階があると論じられる (Robinson, 1976など)。

ひとつは、1730年代をピークに新しい農業技術の数々が英国に導入されたことにはじまる。代表的な技術革新は、冬期に家畜の飼料とするカブ turnips の栽培を導入したことにはじまる。それまでは、冬を前に家畜を処分するのが慣例であったが、カブのおかげで家畜を年間通して飼育することが可能となった。また効果的な牧草としてクローバーが導入された。さらに、新しく改革された農法では年中飼育が可能になった家畜の糞尿による施肥の効果で穀物の生産性をより高めることができるようになった。英国の従来農法であった三圃制では耕地利用のサイクルに組み込まれていた休耕地は、新農法では必要が

なくなった。カブの導入・家畜の糞尿の施肥・休耕地をなくした効率的な農地利用などに代表される新農法は東南部の低地ノーフォーク地方ではじめられたため、ノーフォーク農法と総称される。ノーフォーク農法は牧畜と穀物生産の農業に特徴があり、穀物の生産性を著しく高めた。いっぽう北西部のミッドランドやランカシャー地方では、ノーフォーク農法は導入することができなかった。北西部の高地は、土壌が固い粘土質のためである。そのため北西部では、穀物生産では東南部とは対抗できなくなり、牧畜と手工業を中心とすることに転換し、独自の産業の革新を模索した。やがてミッドランドやランカシャー地方は毛織物、綿織物産業の中心として発達し、産業革命の発祥地となる (川北編, 1998: 247-8)。

もうひとつの農業革命のピークは、1770年ごろから1815年頃にかけて、進歩的な大地主の地所の改良 improvement の組織的な実践を通じて遂行された。この時代の英国の進歩的な地主は、ノーフォーク農法に代表されるような最新の科学的な知識に基づいた農業技術を地所の自家農場に実験的に導入して進歩的な農業経営を行うことで、土地の生産性を高める改良 improvement を行った (Daniels et al., 1999; シーモア, 2005)。そのような地所の改良 improvement を熱心に推進した地主には、「ノーフォークのコーク家」‘Coke of Norfolk’ として知られるホークカム地所 the Holkham Estate の地主トーマス・ウィリアム・コーク Thomas William Coke (Martins, 1980)、英国南西部サセックスのペットワース Petworth 地所の地主である第3代エグモント卿 the 3rd Earl of Egremont (Rowell, 1997)、英国東部ケンブリッジシャーのウィンボール Wimpole のモデル農場 Home Farm の創始者であり熱心な農業改良者フィリップ・ヨーク、第3代ハードウィック卿 Philip Yorke, the 3rd Earl of Hardwicke などが数えられる。

これら農業革命期に隆盛をきわめた農場のうち、現在、モデル農場を一般に公開して展示を行っているのは、ケンブリッジシャーのウィンポール Wimpole のモデル農場 Home Farm である。ウィンポール・ホールの最後の所有者 Mrs Bambridge が没した1976年に、彼女の遺言によりウィンポールの自家農場 Wimpole Home Farm を含むウィンポール・ホールの建造物と地所はチャリティによって運営される公益団体であるナショナル・トラストに遺贈された (Souden, 1991)。本稿では、1976年にナショナル・トラストに譲渡され、1980年から一般公開されたウィンポール・ホールの自家農場を、現在、ナショナル・トラストが、どのように文化遺産として管理し、展示しているのか、どのようなツーリズムと教育の資源として活用しているのか紹介する。

II ウィンポールのモデル農場 Home Farm の創始者フィリップ・ヨーク、第3代ハードウィック卿 Philip Yorke, the 3rd Earl of Hardwicke と後継者たちの農業改良

ウィンポールのモデル農場 Home Farm の創始者フィリップ・ヨーク、第3代ハードウィック卿 Yorke, Philip, third earl of Hardwicke (1757–1834) とその後継者がどのような人生をたどったのか、オックスフォード国民伝記事典 *Oxford Dictionary of National Biography* とナショナル・トラストが刊行しているガイドブックの記述からみてみよう。フィリップ・ヨークは、1757年にロンドンで生まれ、ハロー校 Harrow School (1770–71) で教育を受け、ケンブリッジ大学のクイーンズ・カレッジに進学し、修士の学位 MA を1776年に受ける。1777年から1779年まで、かれはオランダ、ドイツ、イタリア、スイスへとグランドツアーに出かけた。グランドツアーから帰国後、1780年以降かれの叔父である第2代ハードウィック卿 second earl of Hardwicke の後を継承してケンブリッジシャー選出の政治家として活躍した。1790年にかれの叔父の第2代ハードウィック卿が没すると、後を次いで、第3代ハードウィック卿となった。かれはグランドツアーで、芸術の審美眼を磨き、第3代ハードウィック卿となってからは芸術家のパトロンとしての役割をはたした。かれはグランドツアーの旅先のイタリアで知り合った建築家のジョン・ソーン卿にウィンポール・ホールの黄色の部屋 The Yellow Drawing Room のデザインを依頼した (Rigg, 2006)。ジョン・ソーン卿がデザインしたウィンポール・ホールの黄色の部屋は、ネオクラシカル様式の壮麗なデザインで、評判となった。あわせてかれは、ジョン・ソーン卿にウィンポール・ホールの別の部屋のデザインも依頼した。建築家のジョン・ソーン卿は、グランドツアーで訪れたイタリアに影響を受けたネオクラシカル様式が得意な建築家で、イングランド銀行の建築がかれの代表作である。ロンドンのリンカーンズ・イン・フィールズにあるジョン・ソーン卿の自邸は、イタリアで収集した石像や絵画などの美術品で溢れていて、現在もジョン・ソーン博物館として保存・公開されている (Darley, 1999)。

フィリップ・ヨークが第3代ハードウィック卿としてウィンポール・ホールの主人となった18世紀後半は、農業革命の最盛期であり、進歩的な地主は、地所の効率的な活用のために新しい農業技術を導入する実験的なモデル農場を地所に建てていた。第3代ハードウィック卿は、地所に自家農場としてモデル農場をたてて、最新の農業技術を導入しようとした。かれがモデル農場の建造物の

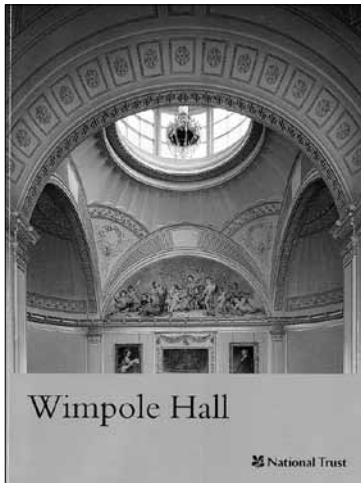


図2 ナショナル・トラストによるウィンポール・ホールのガイドブックの表紙は建築家ジョン・ソーン卿のデザインした黄色の部屋The Yellow Drawing Roomである。(出典: David Souden (1991) *Wimpole Hall* National Trust の表紙)

デザインを依頼したのは、自邸の黄色の部屋のデザインを依頼した建築家ジョン・ソーン卿であった (Souden, 1991; Darley, 1999)。

ジョン・ソーン卿は、中庭を囲んで、四方に建物を配置するモデル農場の建造物をデザインした。第3代ハードウィック卿がソーン卿のデザインに従ってモデル農場を1794年に建造した。配置は、18世紀のモデル農場として典型的であり、経済性と効率性を追求した機能的なデザインであった。ジョン・ソーン卿は、モデル農場に経済性と効率性ばかりではなく、同時に美しさも追求した。ジョン・ソーン卿は、当時の審美眼にかなったピクチャレスクの様式でモデル農場をデザインした。当時、第3代ハードウィック卿とソーン卿は両者とも「原始的な primitive」様式の建築に興味を持っていた (National Trust, 1999: 3)。中庭に向かって四方を囲む建築物のうち中心となるのは、大納屋 Great Barn であった。この大納屋は北に位置して、北風が中庭に吹き込むのを防ぐ役割を果たした。近郊の湿地帯から収穫されるアシ reed で屋根を葺き、壁には防水

のために黒色のタールを塗っている板を使用して、ネズミよけのために地面に近い壁はケンブリッジシャーの地元産のレンガを使用している。背の高い大きな扉は、高く積み上げた牧草や穀物などの収穫物を搬入するときに便利のように機能的にデザインされている。

第3代ハードウィック卿は、農業の改良においてさまざまな実験をモデル農場で行った。ウィン



図3 大納屋 Great Barn の現在の展示: 1794年にジョン・ソーン卿が3代ハードウィック卿のためにデザインし建造された。(筆者撮影)

ポールの地所は、イングランド東南部に位置するが、地所の土壌は、固い粘土質であり、農業革命先進地域のノーフォーク地方に典型的な泥岩質の穀物生産に最適な土壌ではなかった。そのため、ウィンポール地所では農業生産の向上のためには人工的な土壌改良の必要があった。そこで、第3代ハードウィック卿は、耕地の排水を改善する工夫を行って水はけをよくし、地中深くまで耕することができるように土壌改良を行った。このおかげで、ウィンポールでも、さまざまな穀物の効率的な生産



図4 中庭から見たジョン・ソーン卿がデザインしたウィンボールのモデル農場の建造物の現在の展示。ナショナル・トラストのDr Ben Cowell (Regional Director, East of England at National Trust) に農場の文化遺産としての管理と展示について話を伺った。(筆者撮影)

が可能となった。さらに第3代ハードウィック卿は、家畜の品種改良も手がけた。ウィンポール地所の土壌は固い粘土質のため羊は蹄の病気にかかることが多かった。そこで蹄の病気に強い羊の品種をレスター種とリンカーン種の羊をかけ合わせることによって作りだした (National Trust, 1999: 6)。最後に第3代ハードウィック卿が熱心に取り組んだことは、農業の機械化の試みである。19世紀には、蒸気機関による動力を利用した新しい脱穀機が発明され導入され普及しつつあった。ウィンポールでも脱穀機などの農業の機械

化に熱心に取り組んだが、地所で働く農業労働者には、農業の機械化は、機械によって人間の仕事が奪われるという危惧から不人気であった。

第3代ハードウィック卿と、甥で1834年に地所を引き継いで第4代ハードウィック卿となったカール・フィリップ・ヨーク Charles Philip Yorke (1799–1873) はともに地所で働く農業労働者の福祉に気を配って地所の経営を行った。かれらは、最も美しく生産性の高いコテージ・ガーデンを実践した農業労働者を表彰した。さらに、第4代ハードウィック卿は、1849年にウィンボールの地所で働く労働者とその家族が住むためにニュー・ウィンポール村とかれらの子弟の教育のために学校をつくった。そのころが、ウィンポール地所がもっとも農業の生産性も高く、繁栄した (National Trust, 1999: 6)。

しかしながら1873年に父からウィンボールの地所を引き継いだ第5代ハードウィック卿は、地所の堅実な農業的な経営にはあまり熱心ではなく Champagne Charlie's と形容される退廃的な生活スタイルを送った。同時に1870年代の英国は農業不況にみまわれ農業経営にとっては厳しい時代となった。第5代ハードウィック卿は、たちまち財産を食いつぶし、1894年には、借金により地所を債権者に譲り、ウィンポール・ホールを手放さざるを得なくなった (National Trust, 1999: 6)。

Ⅲ 英国農業革命期の歴史文化遺産としてのモデル農場と教育的ツーリズム

本章では、まず i) 21世紀初期におけるナショナル・トラストの哲学のひとつ「場所に生命を吹き込む」視点と ii) 農業革命期のモデル農場の建造物の文化遺産としての視点の確立について検討する。次に iii) ウィンポールを訪れるツーリストへの案内として、ウィンポール地所の中での自家

農場の空間的位置づけについてナショナル・トラストが配布するリーフレットをもとに考察し、iv) 自家農場と教育的ツーリズムについて、どのような展示が行われているのか、希少種の飼育などに代表される「生きた農場」としての今日的意義について考察する。最後に v) 子ども用のガイドブックを紹介しながら、どのように子どもたちが今日生きている農場を観察しながら、実感を持ってウィンポールの農業革命の歴史について学習するのか考察する。

i) 21世紀初期ナショナル・トラストの「場所に生命を吹き込む」‘Bringing places to life’ 哲学
ナショナル・トラストの2010年から2013年までの3冊の年間事業報告書によると、以下の3つの活動指針をあげている。

- ・場所に生命を吹き込む bringing places to life
- ・野外に出て自然と深く接する getting outdoors and closer to nature
- ・ベストをつくす performing at our best

ナショナル・トラストが所有する資産は、どれもがユニークな場所であり、その場所に積み重なった豊かな歴史や文化による独自の物語を持っている。その物語を訪問者が楽しく体感しながら、理解できるように、管理して、展示を行うのが、一番目に記された指針「場所に生命を吹き込む」‘Bringing places to life’ 哲学である (National Trust, 2011; 2012; 2013)。ナショナル・トラストの資産を訪れるすべてのツーリストが、その場所の歴史や文化に触れられるような独自の豊かな経験ができるように展示に工夫するのかナショナル・トラストの使命である。たとえば、2011年の事業報告書では、「私たちは展示のロープを外して、ツーリストを展示物の中に招き入れ、ピアノを弾いたり、ふかふかのソファに座って本を読んだり家族のアルバムを見たり、ピリアードをするようにと誘いこむような展示を行ったこともあった。しかしながら、ほんとうにその場所に生命を吹き込むような展示をするためには、その場所について学術的な研究を重ねることによって得た成果を示して、そこにかつて住んでいた人びとの生活の物語や思いをツーリストに感じ取って経験を共有するような展示をしなければならない。」(National Trust, 2011: p.18) と述べられている。

ウィンポール地所では、2013年10月5日6日に Wimpole Uncovered というイベントが行われた。Wimpole Uncovered では「ウィンポールの所有者はそれぞれの世代で、それぞれの技術で土地を耕し食料を得るために農業を行ってきた。農業の技術によってウィンポール地所の風景は時代によって変化してきた。ウィンポール地所の風景がどのように変化してきたのか探究をしましょう。」(<http://www.nationaltrust.org.uk/article-1355798680277/> 2013年10月11日閲覧) という趣旨で、2日間にわたって専門家によるさまざまなガイドツアーが実施され、年代物の農機具が実演された。同時に最新式の農機具など、さまざまな種類の農機具を実演してフィールドで収穫を行った。ウィンポールで実践しているオーガニック農法について Natural England から招いた専門家とともに意見交換会が行われた。また、飼育する希少種の家畜の価値について理解するためのガイドツアーも

実施された。このイベントは、ウィンポール地所がたどってきた歴史のさまざまな面に光を当て、「場所に生命を吹き込む」展示の試みであった。ウィンポール地所は、農業革命時代に最先端のモデル農場であったと同時に、現在もナショナル・トラストが経営する最先端の農場としてのあり方を模索しながら活動を実践している。

ii) 農業革命期のモデル農場の建造物の文化遺産としての視点の確立

ジョン・マーティン・ロビンソン John Martin Robinson が1976年に『建築史 *Architectural History*』19号に執筆した論文「改良の時代のモデル農場の建造物 ‘Model Farm Buildings of the Age of Improvement.’」によると、18世紀から19世紀の農業革命時代には、「農業技術の革新に熱心に取り組む地主は、家畜小屋や納屋など農作業の目的に応じて多種多様な建造物を地所にデザインして建造したが、驚くべきことに、それらはロバート・アダムやジョン・ソーン卿など同時代の著名な建築家によって設計されたのにもかかわらず、現在まで建築史家たちはモデル農場の建築物について記録し保全するといった学術的な見地から真剣に調査してこなかった」と問題提起し、かつて改良に熱心であった地主の地所に現存する農業のための建造物の現況について調べ、文化遺産として価値づける必要性を提言した (Robinson, 1976)。ウィンポール・ホールがナショナル・トラストに寄贈されたのは、農業的建造物の記録と保全について問題提起を行ったロビンソンによる論文が発表された1976年であった。ウィンポール・ホールがナショナル・トラストに寄贈された当初は、ウィンポールの自家農場の建造物は、見捨てられたひどい状態 *semi-derelict* であったとガイドブックにも語られているが、ナショナル・トラストによって、モデル農場の文化遺産としての修復と、公開に向けた計画が、ただちに実行され、1980年以降一般に公開展示されている (Thackray, 1995; National Trust, 1999)。

ロビンソンが農業革命期のモデル農場の建造物について文化遺産として記録・保全することをうたった論文が執筆されてから35年以上がたつ現在は、農業革命時代のモデル農場の建造物に対して学術的な光があてられ文化遺産として保全され、観光や教育の貴重な資源として活用されている。

iii) ウィンポールを訪れる観光客への案内「羊とシャンデリア」：自家農場の空間的位置づけ

現在ウィンポール・ホールを訪れる観光客は駐車場に自動車を駐車するとその正面のエントランスとなる馬車厩舎 *Stable Block* にあるチケットオフィスとインフォメーションセンターでウィンポール訪問の観光に必要な情報を得る。ウィンポール・ホールの入り口で配布される無料の簡便なリーフレットには「羊とシャンデリア *Sheep and chandelier*」というタイトルで端的にウィンポール・ホールの2つの魅力が語られている (図5)。ひとつは、羊=自家農場 *Home Farm* であり、もうひとつは、シャンデリア=美しい邸宅であるカントリーハウスのウィンポール・ホールである。このリーフレットの裏面の地図には、広大なウィンポール・ホールの敷地の中でこの馬車厩舎 *Stable Block* にあるエントランスから邸宅であるホールや自家農場までの移動距離と徒歩による移動時間について「邸宅 *Hall* まで200m 4分、庭園の門 *Garden Gate* まで112m 2分、レストランまで120m



図5 エントランスで無料で配布されるリーフレットの表紙「羊とシャンデリア」。

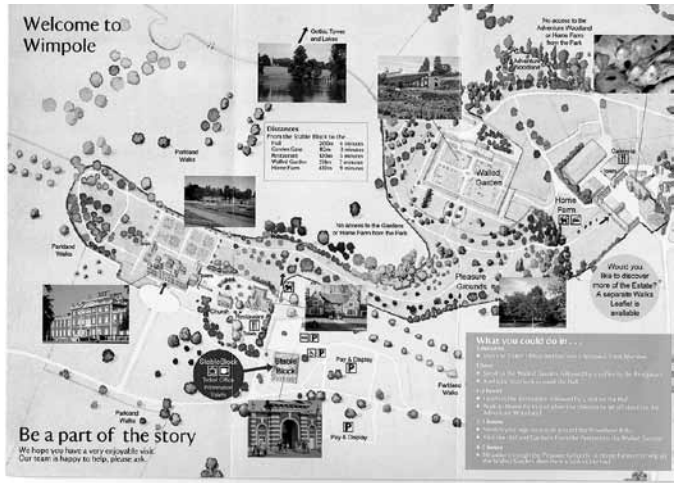


図6 エントランスで配布されるウィンポール・ホールの地図、前図の裏面。

3分、壁に囲まれた庭園 Walled Garden まで518m 7分、自家農場 Home Farm まで 612m 9分」と記している。エントランスから自家農場までは、北方へ向かって木々の茂る散歩道のある Pleasure Grounds を612m 9分程度歩いてようやく到着する。自家農場は、邸宅とは反対方向にあり、エントランスからも北側の一番遠くに位置している。つづいて、地図には、見学にかかる時間の目安を次のよう記している：

それぞれの時間であなたはウィンポールで何ができるのか…

5分あったら

- ・チケットオフィスを訪ねてナショナル・トラストのメンバーになる

1 時間では

- ・壁に囲まれた庭園 Walled Garden を散策してレストランでコーヒーをどうぞ
- ・邸宅 Hall の外周と庭園を散策して、邸宅の外観を鑑賞するのはいかがでしょうか

1-2時間では

- ・レストランで昼食をとり、続いて邸宅の中を見学する
- ・自家農場まで歩き、子どもたちを冒険の森 Adventure Woodland で遊ばせる

2-3時間では

- ・樹林帯 Woodland Belts の遊歩道まで足をのばす
- ・邸宅を見学し、幾何学的にデザインされた庭園 parterre から壁に囲まれた庭園 Walled Garden まで散策する

4-5時間では

- ・樹林による遊歩道 Pleasure Grounds から自家農場までじっくりと見学し、壁に囲まれた

庭園 Walled Garden を経由して邸宅に向かい、邸宅の中を見学する

以上のように、ウィンポールを訪れる観光客の視点にたつて見学に費やすことのできる時間に応じて、何を見学したらよいのかという目安が示されている。ウィンポールは、敷地の施設をすべて堪能するためには、4-5時間かかるとナショナル・トラストでは見積もっているが、それぞれの観光客の都合に応じて見るべきものを示している。自家農場は、邸宅といろいろな種類の庭園などとともウィンポールの魅力のひとつを占めているが、ホールの敷地の最も北側のはずれに位置する。

iv) ウィンポール・ホールの自家農場 Wimpole Home Farm と教育的ツーリズム

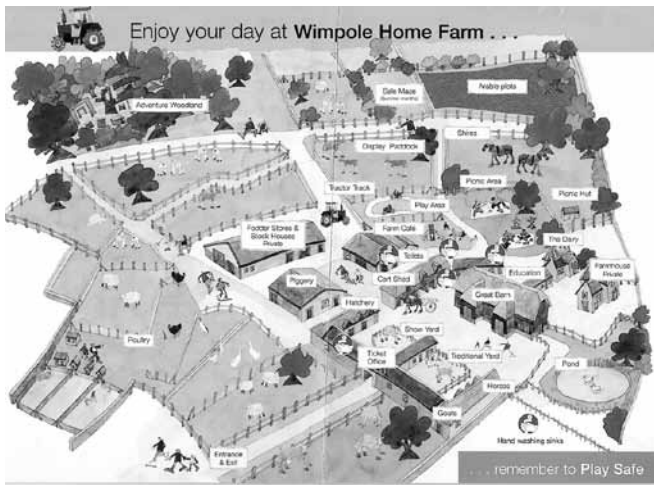


図7 ウィンポールの自家農場の建造物の配置についての絵地図。

ウィンポール・ホールの農場は、子ども連れの家族が、動物を見たりピクニックをして一日楽しむことのできるレジャーの場所であるとともに、子どもにとっては、農業の歴史や家畜について学ぶことのできる学習の場所としてもデザインされている。

ウィンポール・ホールの自家農場 Wimpole Home Farm に入場するには、ホールとは別料金が設定されている。自家農場では、現在は一般的には飼育されなくなったさまざまな家畜の原種や伝統種、希少種などの rare breeds が飼育されている。英国の Rare Breeds Survival Trust では英国の家畜の希少伝統種の遺伝子の保存を目的に、組織的に rare breeds の飼育を行っている (Alderson, 1995)。希少伝統種 Rare breeds に関心をもつ人びとにとっても、ウィンポールの自家農場は、多くの

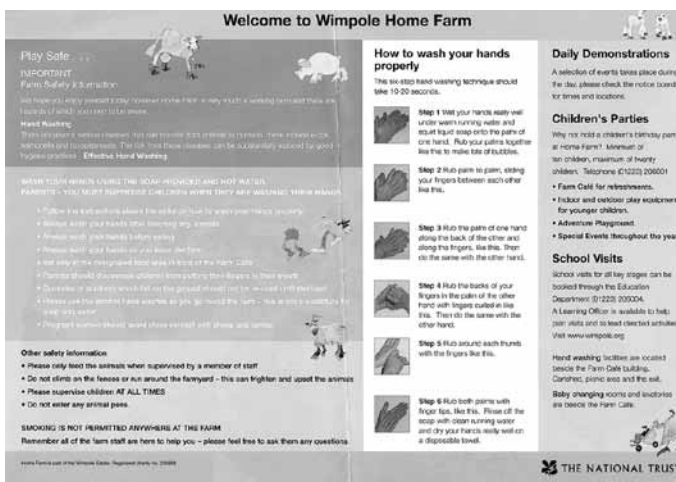


図8 絵地図の裏には、安全な手の洗い方や諸注意が記されている。

希少種 rare breeds を見学することのできる訪れるべき場所となっている。

チケットオフィスでは、自家農場の家畜小屋などの建造物の配置を示す絵地図を配布している（図7）。絵地図では、伝統的な農業の建造物の配置とともに、ピクニックエリアや子どもの遊び場などもしるされ、子どもと一緒に家族が楽しめるような場所としてデザインされている。自家農場の中での安全のための配慮として、農場カフェやピクニックエリアなど訪問者が飲食をしてもよい場所と、家畜動物を飼育しているエリアなど訪問者に飲食を禁じている場所に分けていて訪問者にガイドラインに従うように注意を促している。加えて、訪問者の安全のために、食事の前や、農場を去る前には、必ず石けんと湯で手を洗うことが推奨され、絵地図には水道の位置が強調して示されている。絵地図の裏には、安全な手の洗い方や安全に関して大人がどのように子どもを指導すればよいかなど自分と家族の身を守るために必要な情報が記されている。

チケットオフィスをくぐると、中庭がひらけ正面に大納屋 Great Barn の姿が目に入る。この大納屋は、18世紀後半に活躍した建築家ジョン・ソーン卿が1794年に第3代ハードウィック卿のためにデザインし建造された。

自家農場のチケットオフィスを出た中庭には、黒板があって家畜の餌やりなどの当日のアトラクションの時間が明示されている。黒板の案内によると豚の餌やりが豚小屋で行われていて、11:30、2:00、4:00の一日3回みることができる（図9）。豚小屋に行くと、Tamworth や Berkshire などの希少伝統種が飼育されていて、訪問者は餌やりを手伝ったり、子豚を触ったりすることができる（図10）。豚小屋には黒板が掲示されていて、豚が何月何日に出荷されて、加工され肉やソーセージとなって、ナショナル・トラストのショップで販売されているという情報や、豚の出産シーズンには希少種



図9 自家農場 Wimpole Home Farm の中庭にある今日の予定：豚の餌やりなどの予定が明示される。（筆者撮影）



図10 豚小屋で豚の餌やりを見学する子どもたち。（筆者撮影）

の子豚の販売についての情報が掲示されている（図11）。ウィンポールの自家農場は、ナショナル・トラストが経営している生きた農場という側面を持っている。

いっぽう、ウィンポールの自家農場では、農業革命の歴史について、ウィンポールを位置づけるような展示をパネルと農機具などの実物の展示によって行っている。

v) ガイドブック：特に子ども用のガイドブックに注目して
ナショナル・トラストは、ウィンポールの自家農場 Wimpole Home Farm に関して、2冊のガイドブックを刊行している。一般用と子ども用 A Guide for Children のガイドブックの2冊である。

Wimpole Home Farm の一般用のガイドブックの章立ては以下の通りである。

- ・ ウィンポールの自家農場：希少な建造物の中の希少な家畜 Wimpole Home Farm: Rare Breeds in Rare Buildings
- ・ 農場の建造物 The Farm Buildings: The Great Barn, The Cattle Sheds and Stables, The Dairy, The Stag Pens
- ・ 先駆的な農場主 A Pioneer Farmer
- ・ 希少伝統種の重要性 Why Rare Breeds?
- ・ どの希少伝統種を飼育しているのか？ Which Rare Breeds?: sheep, goats, cattle, pigs, horses, poultry
- ・ 畜産 Animal Husbandry
- ・ 畜産の年間スケジュール The Farming Year
- ・ 農場に生命を吹き込むために Bringing the Farm back to Life

子どもを対象としたガイドブックでは、ウィンポールのモデル農場を観察しながら、農業革命の歴史について実感を持って学べるように工夫がされている。ガイドブックの裏表紙には、ウィンポールの農場を探検するための視点として、次のように記されている。

- ・ 1790年代には農場はどのようであったのか考えてみよう
- ・ 動物の希少種を観察しよう

子ども用のアクティビティは、黒板の今日の予定（図9）を見て、農場で見ることをリストアッ



図11 豚小屋では、豚がいつ出荷されて、肉となって、ナショナル・トラストのショップで販売されているのかという情報や、子豚の販売についての情報が明示される。（筆者撮影）

プすることからはじまる（図12）。子どもたちに向けてウィンポールの自家農場について次のように紹介する：

ウィンポールの自家農場は200年以上もまえにつくられた。農場が、1794年に建てられたときは、当時の最新のハイテクを駆使し、農業について最先端の考えがもりこまれていた。ウィンポールの自家農場には、いつ来ても、いつも前とは違った物を見ることができる。現在も生きている農場である。(National Trust, 1999)

ウィンポールの自家農場を建造した第3代ハードウィック卿のことを「実験好きの伯爵 The experimental Earl」として次のようにウィンポールと農業の改良 improvement について説明する：

ウィンポールのモデル農場は、フィリップ・ヨーク、第3代ハードウィック卿が建造した。かれの自邸、ウィンポール・ホールには、かれの家族と雇用人たちのために食料を供給するための農場はすでにあった。伯爵が望んでいたことは新しく科学的な何かを改良として加えることだ。かれは、有名な建築家のジョン・ソーン卿に助けを求めた (National Trust, 1999:1)。

マンガのせりふでは第3代ハードウィック卿とソーン卿の会話が次のように展開する：

第3代ハードウィック卿：「ソーンさん、最新式の設備を全部備えたような農場を君にデザインしてもらいたいのだよ。」
ソーン卿：「かしこまりました。それだけではなくて、ウィンポールの自家農場は見た目も美しいものをつくってさしあげます。」
(National Trust, 1999:1)

第3代ハードウィック卿とソーン卿は、当時の科

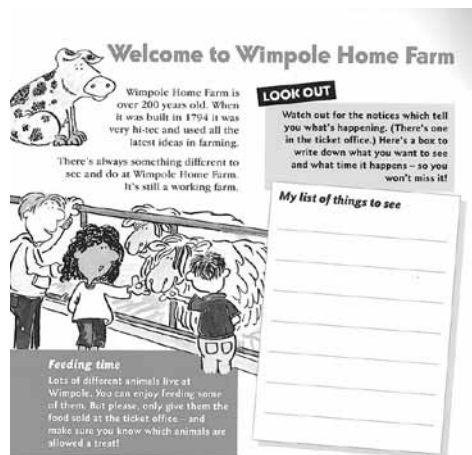


図12 ようこそウィンポールの農場へ：子供用のガイドブックより（出典：National Trust (1999) *A guide for Children : Wimpole Home Farm*. National Trust Education.)



図13 農業の実験好きの第3代ハードウィック卿について：子供用のガイドブックより（出典：National Trust (1999) *A guide for Children : Wimpole Home Farm*. National Trust Education.)

学と技術の改良を取り入れた最新式で、なおかつ美しいものを追求するという哲学を共有していたことを子どもにもわかりやすく伝えている。

さらに、ガイドブックでは、ハードウィック卿の行った最初の改良「カブ Top Turnips」栽培の導入の意義について次のように子どもたちにむけて説明する：

たくさんの農場では冬を前にして家畜の動物を殺さなくてはならなかった。なぜなら家畜たちは冬の間何も食べるものがなかったからだ。ハードウィック卿が行った最初の改良のひとつは、耕地の水はけに改良を加えて地中で作物が腐るのを防いだことだ。かれのこの聡明な考えは冬の間家畜たちのエサとなるカブをもっと作ることに繋がった (National Trust, 1999:1)。

ガイドブックでは、子どもたちに向けて、現在、ウィンポール自家農場では、家畜の希少種を飼育することにどのような意義があるのかを「最重要動物 Very important animals」という見出しのもとで語っている：

ウィンポールの家畜動物の希少種は見た目が素晴らしいということだけではない。希少種の家畜のうち多くは、もしその種が死に絶えてしまったら地球上から永久に失われてしまうような特別な特徴をもっているのだ。現代の農場で通常飼育されている家畜は、限られた品種のみにたよっている。ウィンポールでも飼育している家畜である Dexter cow のような品種が再び重要となるような時が来るとは誰も予想できなかったことであろう (National Trust, 1999:7)。

続いて、ガイドブックではウィンポールでも飼育されている Dexter cow という希少種がなぜ現代、重要性が見直されているのかというクイズが出題される。答えの選択肢は「a) チョコレートの香りのミルクを出す、b) とっても小さいので農場の人はミニの中に乗せて市場へつれていくことができる、c) 一度も狂牛病 ('mad cow disease') にかかったことがない」が用意されている。正解は c) であり、解説として「Dexter 種は一度も BSE(mad cow disease) に罹ったという記録のない唯一の品種である」ことが記されている (National Trust, 1999:7)。1990年代から2000年代にかけて、英国では BSE さらには口蹄疫といった家畜病が深刻な問題となった。現在、希少伝統種は、家畜病に強い抵抗力をもつという点からも見直されている。

Very important animals

Wimpole's rare breeds are not just nice to look at. Many of them have special characteristics that would be lost forever if they were allowed to die out.

Modern farms rely on just a small number of different breeds. You never know when one of Wimpole's animals, such as the Dexter cow, might become important again.

Can you guess why the Dexter cow is so special?

- a) it produces chocolate-flavour milk
- b) it's so small that the farmer can take it to market in a Mini
- c) it has never had 'mad cow disease'



図14 重要な家畜の希少種：子供用のガイドブックから (出典：National Trust (1999) *A guide for Children : Wimpole Home Farm*. National Trust Education.)

IV おわりに：ウィンポールの自家農場に関する展示の最先端をめぐる

ウィンポールを舞台に2011年5月から2012年秋にかけての18ヶ月間にわたって英国のマスコミにも注目された試み「私の農場 MyFarm」というプロジェクトが行われた。インターネットのオンラインで農場の生中継を常時行い、農場から担当者が常にブログで農場の現況を発信した。農場の運営に関する判断について、オンラインでネット投票を行った。「私の農場 MyFarm」プロジェクトについてナショナル・トラストのホームページをのぞいてみよう (<http://myfarmnt.com/2013年10月20日閲覧>)。例えば、2011年5月には、「ウィンポール農場内の Pond Field という耕作地に、小麦、大麦、オーツ麦のどの穀物を植えるのがよいでしょうか？」というネット投票が行われた。ネット投票では小麦が多数を占めるという結果が6月に明らかにされた。そこで、ウィンポールでは実際に小麦を植えることが決定したが、続いて、どの品種を選ぶのが再びネット投票で問われた。選択肢は Magister もしくは Panorama か？ ネット投票では Magister が多数となる結果が8月に公表された。すると、「どのように植えるのか？1ヘクタールあたり220kg、もしくは1ヘクタールあたり180kgか？」がネット投票で問われた。2011年8月22日に、結果が公表された。1ヘクタールあたり220kgに投票したのが75%、1ヘクタールあたり180kgが25%であった。「私の農場 MyFarm」プロジェクトは、このように次々と実施されるネット投票の結果による意思決定にしたがって、ウィンポールの農場で農業が実践されるという実験であった。

同時に家畜についても、例えば、ウィンポールであらたに飼育する羊の品種について、希少種がよいのか、商業種がよいのか2011年5月にネット投票で問われた。ネット投票では希少種が大多数を占めるという結果が公表されると、続いて、どの希少種の品種がよいのか再びネット投票が行われた。選択肢は、Hill Radnor、Oxford Down、Norfolk Horn の3種である。2011年7月には、ネット投票では Oxford Down が66%獲得したという結果が公表された。2011年11月には、あらたな Oxford Down の群れがウィンポールに到着した。翌年2012年1月からはじまる羊の出産のシーズンには Oxford Down の群れにも多くの子羊が誕生するシーンがネット中継された。

ウィンポールの家畜の食肉加工の方法についてもネット投票が行われた。2011年秋には、ウィンポールの豚を出荷した後に、ソーセージに加工する方法について、どのようなレシピによるのがよいかがネット投票で問われた。結果は地元のケンブリッジシャーの伝統的なレシピが優位となった。このソーセージは、ナショナルトラストの売店で販売されることとなった。このプロジェクトのさなか、2011年8月には、ウィンポール農場が英国の The Soil Association からオーガニック農場の認定 Organic Accreditation を受けたというニュースも報道されている。過去2年のオーガニックの実践が稔ったとブログには記される。ウィンポール農場で、オーガニックな方法で飼育された豚による豚肉を地元の伝統的な方法でソーセージに加工するという価値観が、ナショナル・トラストとネット投票で共有された。

この「私の農場 MyFarm」プロジェクトでは、農場経営で行わなければならない意思決定がネット投票で問われた。「私の農場 MyFarm」プロジェクトは、選択肢についての情報も開示され、ネッ

ト投票に参加する人びとは、現在の農業のあり方についての議論に参加して、意思を投票によって示すことで、ウィンポールの農場経営の意思決定に参加することができるという試みであった。

現在、人びとは、スマホや iPad などを手放せない情報社会に住んでいる。子どもたちも、このような情報社会の中に生きている。実際に、ウィンポールの農場を訪れて、興味を抱いた人びとが、持続的にナショナル・トラストの運営するウィンポールの農場に興味を持ってもらうためには斬新な方法であるのかもしれない。しかしながら、生きた家畜を扱う農場という場所の持つにおいや音などの身体感覚はネットの世界では体験することができない。同時にこのような展示の方法が、家畜の生命を決定すること、あるいは、私たち人間は、家畜の生命をいただき肉として食べているのだということに向き合う現場としてオンラインがふさわしいのかという議論も提示されている。

「私の農場 MyFarm」プロジェクトについて、ナショナル・トラストの東イングランド地区ディレクターの Dr Ben Cowell は「率直にいうと評価はまだ定まっていない。メディアによって「私の農場 MyFarm」プロジェクトを評価する記事がたくさん書かれ、一般からもポジティブな評価をたくさん受けている。しかしながら、この「私の農場 MyFarm」プロジェクトにオンラインで参加した人びとの数はナショナル・トラストが期待したほど多くはなかった。これは、農場や農業に一般の人びとに関心を喚起する社会実験であった。」(筆者が2013年8月に行ったインタビュー)と評価する。ナショナル・トラストは、この「私の農場 MyFarm」プロジェクトにオンラインで参加したアクセス数は、18ヶ月でのべ10,000人であったとホームページで公表している (<http://myfarmnt.com/2013年10月20日閲覧>)。実際にウィンポールのホール(邸宅)と農場を訪れた人びとの数は、2013年に刊行された年間事業報告書によると2011/12年は、142,890人(農場)と128,490人(邸宅)であった(National Trust, 2013)。

この新しいオンラインの展示と実際に農場を訪れることの相乗効果が期待されていた。現実のウィンポール農場とウェブの中のヴァーチャルな世界とのリンクが、多くの人びとへの現在の農と食への関心を喚起した。「私の農場 MyFarm」プロジェクトは、人びとへ農場の意思決定へ参加をうながすことが可能な農場の展示方法として実験的に呈示された。このようにナショナル・トラストは「場所に生命を吹き込む」ような展示を伝統的な方法から最先端のテクノロジーを実験的に駆使する方法まで幅広く、子どもから大人まで関心を喚起するように模索している。

謝辞: 筆者は、ナショナル・トラストの Dr Ben Cowell (Regional Director, East of England at National Trust) に、Wimpole Hall と Wimpole Home Farm を丁寧に案内していただき、資料調査にご協力いただき、インタビュー(2013年2月および8月)に快く応じていただきましたことを深く感謝いたします。

参考文献

川北稔編(1998)『イギリス史』山川出版社

シーモア, S (米家泰作訳)(2005(原著は2000))「風景の歴史地理」、グレアム/ナッシュ編(米家泰作・山村亜希・上杉和央訳)『モダニティの歴史地理下巻』古今書院

スティーブソン, K.B. (中村和郎訳, 1977)『全訳世界の地理教科書シリーズ3: イギリスその国土と人びと』帝国書院

- Alderson, Lawrence (1995) *Rare Breeds*. Shire Publications.
- Crawford, Rachel (2002) *Poetry, Enclosure, and the Vernacular Landscape 1700-1830*. Cambridge University Press.
- Daniels, S; Seymour, S, and Watkins, C. (1999) 'Enlightenment, Improvement, and the Geographies of Horticulture in later Georgian England.' (345-371), Livingstone D. and Withers, C (1999) *Geography and Enlightenment*. University of Chicago Press.
- Darley, Gillian (1999) *John Soan: An Accidental Romantic*. Yale University Press
- Martins, Susanna Wade (1980) *A Great Estate at Work: the Holkham Estate and its Inhabitants in the Nineteenth Century*. Cambridge University Press.
- National Trust (2013) *50 Things to do before you're 11 3/4: My Adventure Notebook for Wild Times Outdoors*. National Trust
- National Trust (2013) *National Trust Annual Report 2012/13* National Trust
- National Trust (2012) *National Trust Annual Report 2011/12* National Trust
- National Trust (2011) *National Trust Annual Report 2010/11* National Trust
- National Trust (1999) *Wimpole Home Farm* National Trust
- National Trust (1999) *A Guide for Children: Wimpole Home Farm*. National Trust Education
- Rigg, J. M. 'Yorke, Philip, third earl of Hardwicke (1757–1834)', rev. Hallie Rubenhold, *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004; online edition, May 2006 [<http://www.oxforddnb.com/view/article/30248/2006-05>, accessed 21 Sept 2013 as archived article (no longer current version)]
- Robinson, John Martin (1976) 'Model Farm Buildings of the Age of Improvement.' *Architectural History*, 19. (p.17-31, 89-92)
- Rowell, Christopher (1997) *Petworth House*. National Trust
- Soane Gallery (1999) *Vision of ruin: architectural fantasies & designs for garden follies*. Sir John Soane's Museum
- Souden, David (1991) *Wimpole Hall* National Trust
- Thackray, David (1995) 'The Industrial Archaeology of Agriculture: Rural Life Collections and the National Trust.' *Industrial Archaeology Review*, 18-1. (p.117-131)